

はじめに

国際色豊かな“猪飼野”界わいは、大阪のもう1つの顔である。

“猪飼野”の地名は現在の地図にはないが、JR 鶴橋駅・桃谷駅の東方、平野運河の両側一帯あたりがおおよその位置である。在日韓国・朝鮮人の街として有名だが、このまちに定着した事情をはじめ、古い歴史や地名の由来などは、一般にはあまり知られていない。

“猪飼野”は、異文化が同居する味わい深いまちである。数々のエピソードがあり研究領域も幅広い。今回、旧村の歴史や史跡、猪飼野と在日韓国・朝鮮人との縁などを調べ、現在ここで生きる人々の活動や思いを取材するうち、大阪の中でも珍しいほど、歴史的文化的な歩みが、まちや人々に深く刻まれているのを痛感した。この地域の営みそのものが、個性あふれる資源であることをお伝えできればと思う。

1. 猪飼野の成り立ち

猪飼野の地名の由来は、「日本書紀」仁徳十四年条に記された「猪甘津（いかいつ）の橋」に求められる。「冬十一月為橋於猪甘津即号其処曰小橋也」（猪甘の津に橋わたす、すなわち其のところをなづけて小橋という）という記事があり、「猪甘」は、猪飼・猪養と同意で、朝廷に献上する猪を飼育していた猪飼部（いかいべ）の住居地であったと考えられている。この「猪」は、野生のイノシシではなく、渡来人が大陸から持ち込んだブタであるという説が有力である（注）。「猪甘津」は、旧平野川の河口付近にあった港で、そこに交通路としての橋が架けられたということである。これが文献上日本最古の橋である「猪甘津の橋」で、後の「鶴の橋」だと伝えられている。猪飼部は、飛鳥時代以降、殺生を禁ずる仏教の教えが普及するのに伴って消滅し、地名だけ残ったらしい。

このあたりは、百済からの渡来人が多数居住したと考えられている。百済国は663年、唐・新羅連合軍に攻め滅ぼされ、百済から大勢の人が日本へ渡来し、百済王一族が難波に居住したことが、「日本書紀」天智3年条に“百済王善（禅）光王以て難波に居べらしむ”と記されている。その最初の居住地が今の天王寺の東部であり、この一帯に、百済郡ができたと考えられている。現在も地名が残っている。例えば、生野区の林寺にある「百済」バス停、JR関西の駅名（現在は、東部市場前駅）の他、旧平野川はもと百済川といい、大正14年東成郡の大阪市編入までは、旧生野村の南に北百済村、南百済村があり、市電にも百済停留所があった。四天王寺のすぐ東に百済村の字名もあったという。

この地域は、室町期、猪養野庄（四天王寺領としての記録「天王寺金堂舎利講」記）と呼ばれた時期があるが、近世以降、猪飼野村になる。村は、ほとんどが農家で、田は一毛作で主には稲作、畑は主に綿作であり、余業として木綿稼ぎ、わら仕事といった内容であった（「猪飼野村明細帳」転載記）。これは明治期まで変わらず、生駒山裾まで、一望田畑が続いていた。

明治22（1889）年、“市町村制”の施行により大阪市が発足し、この地区は、猪飼野、岡、木野・東小橋、小橋の5か村が合併して「東成郡鶴橋村」となり、各村は大字となった。「鶴橋」は旧平野川にかかっている「鶴ノ橋」からとった名である。明治28年5

月に天王寺 玉造間に大阪鉄道（現在のJR大阪環状線の当初の姿）、大正3年4月に上六奈良間に大阪電気軌道（現在の近鉄線）が開通し、大阪の急激な市街地化と人口増の波が、郊外である猪飼野まで押し寄せることになる。耕地整理が大正8年頃から実施され、洪水で人々を悩ませた平野川の改修工事も、当初は農業生産向上を目的に開始されたが、整備された農地は住宅地となり、人口が激増した。

鶴橋村は鶴橋町と変更され、大正14年東成区の一部として「猪飼野町」となる。昭和18年生野区が創設され、猪飼野は東成・生野両区にまたがることになり、その後、鉄道、新平野川、各道路を境界とする住所表示変更が必要になった。そして昭和48年、猪飼野の地名が消え、鶴橋、玉津、中川西、中川、桃谷、勝山、田島などの町名に区切られることになった。

注) 弥生時代の遺跡から出土されたイノシシの多くは、その骨格形質調査により、実は家畜化されたブタであった、という研究報告が出されている。この弥生ブタの由来は大陸の確かな資料がないため不明だが、今のところ、弥生人が約500年の短期間である弥生時代に野生のものを家畜化したと考えるより、渡来人がブタを大陸から持ち込んだと考える方が自然であろうという結論である。（「弥生時代のブタについて」西本豊弘著、「イノシシとブタを考える」安部みき子著より）

なお、本来、中国ではブタを「猪」と表記する（イノシシは「野猪」と書く）。

2. 猪飼野 旧村を歩く

郷土史を研究する足代健二郎さんの案内で、旧村を訪ねた。

JR 桃谷駅から南東に少し行った所にある「御勝山」から探索を始める。ここは、大阪冬の陣で徳川秀忠が陣を設けて勝ったことから名がついた。もともとは5世紀頃に築造された前方後円墳だが、道の拡張で現在は分断されている。勝山通りを挟んで南の公園には、昔このあたりを散歩したという折口信夫の歌碑がある。少し東へ進むと“旧平野川”の名残である土手道（平野街道）がカーブを描いて交差している。ここを北上する。天王寺から続く“歴史の散歩道”として“つたい石”が敷設されているルートである。この曲がった路にそった西側の人家はかなり低くなっていて、この街道が堤防であったことを物語っている。「大峯山上三十三遍」の道標と西俊徳地藏堂のある場所に、「百済橋」が架っていたという。

小路村に入ると、道の東に大きな棕（むく）の木が枝葉を広げている。隣あわせに猪飼野小路の地車の庫（くら）、日露戦役の戦歿者慰霊碑がある。ここが小路の宮跡である（祠は明治18年の洪水で流され神霊を天神宮に合祀したと伝えられている）。猪飼野の集落は本村と分郷であるこの小路村の2つだけであった、ここも御幸森天神宮の氏地であるが、地車は小路独自で一基を所有し、勝五（勝山北五）地車保存会が管理・運営している。この小路村のお寺が圓龍寺。小路の宮跡の少し南側にある4つ辻の東西の道が有名な「俊徳街道」であり、四天王寺と高安を結ぶ伝説の古道である（伝説上の人物の名を引冠した街道名は少ない。俊徳街道は、“俊徳丸”が舞楽修行のため、高安の里から四天王寺に通った道だといわれている）。

韓国曹溪宗普賢寺を通り過ぎると、このあたりでは有名な富豪「木村権右衛門」の邸宅跡に出る。特に17代目（嘉永2年に生まれ、大正3年に死去）は“鬼権”の名と「生駒の山すそまで他人の土地を踏まずに歩いて行ける」という伝説が鳴り響いており、大阪府

会議員をつとめ木村銀行を設立するなどして資産を倍増し、明治23年以来大阪府多額納税者となった。屋敷跡は現在モータープールになっているが、東側の隅に、この邸宅の庭園が残されており、しめ縄が掛けられた椎(しい)の巨木が象徴的に繁っている。当家は大阪夏の陣で討死をした木村長門守重成(ながとのかみしげなり)の姉むこである「猪飼野左馬助(さまのすけ)」の子孫と伝えられ、この神木は樹齢400年、重成公のお手植えという伝説がある。

この近くにある、旧家「大東家」(大東敏男氏)を訪ねた。土蔵の外壁材は古い船板を使っており、300坪以上ある屋敷内には広大な庭園や古い石枠の井戸が現存し、母屋の中(昔の土間)にある井戸は現在も散水用などに使用しているという。足代さんによると、昔の面影を残す旧家の大きなものがこれまでに次々解体され、ここが猪飼野に現存する唯一のものだという。

「安泉寺」はまさに猪飼野村の氏寺で、旧村の人はほとんど檀家であったという。門構えは、前述の17代木村権右衛門の長子(18代目権右衛門)が寄付したものだ。この寺は、集落の中央西寄りに位置し、寺の南側の道が、小字(こあざ)名「北ノ町(きたんじょ)」「南ノ町(みなんじょ)」の境界になっており、他に「東ノ町(ひがっしょ)」「巽(たつみ)」などという集落名の俗称も寺を中心とした方位を示したものであったという。猪飼野保存会の活動拠点である「猪飼野保存会館」も安泉寺寺有地が活用されている。

そして「つるのはし跡」。鶴橋の名前の由来となった“鶴の橋”があった場所であり、日本最古の橋として名高い「猪甘津(いかいのつ)の橋」の跡といわれている。「つるのはし」の名の由来は、江戸時代の地誌「摂陽群談」に「むかし、この辺りに鶴が多く群れ集まったため」と記されているが、「津(つう)の橋」から訛ったという一説もあるようだ。昭和27年、猪飼野若中会(現在の猪飼野保存会)によって記念碑が建てられた。さらに平成3年大阪市顕彰史跡に指定の後、地元から史跡公園の要望が起こったため、猪飼野保存会が公園化へ努力を重ね、歴史の散歩道に沿った史跡で休憩もできる“スポット公園”というコンセプトで「つるのはし跡公園」が平成9年に実現した。

この公園のすぐ西側の四つ辻は、南北に走る鶴橋本通り<平野街道>と、東西に通じる桃谷本通り<大正期の桃谷街道>がぶつかる地点になる(桃谷の街道名や町名は「桃谷駅」が元である。明治28年に誕生した桃谷駅の西の方一帯は、桃畑が広がり桃山と呼ばれていたが、伏見桃山駅と紛らわしいと、明治38年に桃谷駅と改称されている)。このあたりは、鶴が群生したり桃畑があったりと、自然美にあふれた場所であったようだ。

「御幸森天神宮」は猪飼野村全域の氏神で、かつて仁徳天皇が鷹狩りに行かれた折や、このあたりに住んでいた百済の人達とその文化を訪ねた折に休憩になられたなどの言い伝えから、御幸(天子の外出、行幸)の名がついたという。この天神は菅原道真公ではなく、少彦名命(医薬の祖神と崇められている)のことである。境内には、かつての面影として棕の木5本(大阪市の保存樹林に指定)が残されており、平成12年に、本殿・幣殿、拝殿、透塀が、国の登録有形文化財に指定された。

ここから東へ、疎開道路(空襲に備えた建物疎開によってできた道路)を経て、御幸通商店街(詳細後述)を抜けると、新平野川に出る。

コラム<新平野川>

平野運河ともいわれる。猪飼野地区は土地が低く、旧平野川が蛇行しており大雨でたびたび氾濫したため、新たに直線の水路を開削した。同時に舟運で物資の運搬や交通の利便をはかり、さらに水不足の際には、深くしておいた水路に、寝屋川からの水を貯え、ポンプで水田に導くようになった。通説では昭和6年の完成となっているが、川幅を広げたり小石で堤防をつくったり、改修工事は昭和10年頃まで継続されたようだ。平野川の開削工事には、大勢の在日韓国・朝鮮人が従事したことが有名である。

川にかかる橋も、猪飼野のまちの営みを語る命名が多い。例えば「耕整橋」は、耕地整理組合事務所の通りにあたり、耕地整理記念碑の代用をしている。「俊徳橋」は、橋自体は新しいが俊徳街道にかかっている。「猪飼野新橋」は昭和23年に架けられ、昭和62年3月、平野川改修に際してデザインを一新。日本書紀の仁徳天皇の条に記されている「猪甘の津」の名にちなんで「猪飼野」の名前を今に残すものである。

コラム

「猪飼野保存会」「勝五地車保存会」について 足代健二郎氏

猪飼野村には、「本村」と「猪飼野小路」の二集落があり各々地車を保存・継承しています。各村には江戸時代から“若中（わかなか）”と呼ばれる青年組織があり、15歳から結婚するまで加入するのが一般的でした。地車など信仰行事、民俗芸能、警備や土木作業などの村仕事、婚礼への関与や小若い衆への性教育、しつけ・制裁、娯楽としての力石のかつぎ比べなど、重要な役割を果たしていたんですね。力石は現在も、御幸森天神宮に残っています。大正2年以降“猪飼野青年団”となり、戦争でいったん解団したものの、戦後、大阪復興祭への地車参加などを契機として青年会が復活、“猪飼野若中会”“小路若中会”ができた。これが、「猪飼野保存会」や「勝五地車保存会」の前身です。

猪飼野保存会 会長 川野恵弘 氏

昭和48年、生野区の住居表示施行にともない、「猪飼野」の地名がなくなってしまうというので、歴史ある地名と村の文化を伝承しようと、“猪飼野保存会”ができました。「猪飼野」は長い歴史をもつ旧村であり、独自の伝統が有るのです。

猪飼野村の地車は明治20年に作成され、これを継承する会として青年団が発足し、若中会になりました。それを“猪飼野保存会”と改めてからは、従来の、地車の曳行や祭りの継承活動を核としながら、御幸森天神宮の維持のお手伝いや「つるのはし跡公園」の管理など、地域活動も行っています。現在は160人位の会員数で、発足当初の140人位から少し増えています。

御幸森天神宮の祭りは、7月第3土曜日曜の夏祭と10月15、16日の秋祭と年に2回あり、猪飼野保存会の時車が参加します。この時には、地方へ出て行っている人（遠くは、北海道から）も帰ってきます。そして<いくの祭り>にも地車を出します。

3年前からは、弥栄神社の鶴橋若中会から木之村の地車、勝五地車保存会から小路村の地車、そして御幸森天神宮から神輿も出て、同時に集結する大規模な祭りになりました。それまでは、同じ日に別々に行っていましたが、一緒に行くことにより、地域を盛り上げようということになったんです。

夏祭り最後の夜は歩行者天国になります。合同前夜祭として、1週間前に“だんじり囃子演

奏会”も催します。お祭りには、中学生から20代までの経験を積んだ若者（約30名）で組織された“青年部”が、準備や当日の地車の曳行から小さな子供達の世話等で大活躍！当会にとって重大な戦力です。

地元の人は、自分の家の前に地車が来るのを楽しみにしていて、お年寄りなどは手を合わせてくださり、御祝儀を出してくださいます。3回通ったら3回とも御祝儀を出して下さる方もいるほどです。こちらは、天神宮の御札と特製のうちわ・てぬぐいを手渡します。地車には神がやどっているという気持ちを大事にしたいですね。

私はもともと岡山出身で外から来た人間ですが、この猪飼野の地で地車にたずさわり、汗みどろになって「わがまち」としての思いが深まっていくところがありますね。

（このインタビューには、副会長の松本健治さんにもご同席いただいた。）

3. 猪飼野に移住する在日韓国・朝鮮人

猪飼野に渡航者が増えたのは、まさに産業構造の変革により、大阪が経済成長をはじめた時期である。臨海地域では紡績や造船を中心とした重厚長大産業が発達し、大阪は「煙の都」「東洋のマンチェスター」と言われるようになっていた。

明治43（1910）年、日韓併合により、日本は実質上、朝鮮の植民地支配を始めた。その際「土地調査事業」（明治43～大正7年）の名のもとに、朝鮮の土地の多くを日本の国有地とし、「産米増殖計画」（大正10年～昭和9年）で増産を実現して多大な米を日本内地に奪い取った。こうして、生活基盤が解体し生活に困窮した朝鮮人のうち、主に半島北部の人は満州・中国東北部に渡り、南部の人は日本に職を求めて移住した。

移住が本格化したのは大正4年頃だが、加速的に増加し、明治期末には留学生だけで千人に満たなかったのが、大正末には10万人を超えている（表1）。中でも大阪市生野区を居住地とした人数がもっとも多く、東大阪市・東成区も上位に入る（表2）。大正時代以降、韓国・朝鮮から大阪市東部郊外に多く移住したようだ。今日も在日韓国・朝鮮人の数は全国で大阪が一位を占めており（グラフ参照）、生野区の猪飼野周辺はその代表的な地域として認識されている。平成13年6月末現在、生野区内には、外国人登録数36,169人、うち在日韓国・朝鮮人は34,833人が在住し、全区民144,777人の24%、約四分の一を占めている。

<なぜ、猪飼野に多く在住するようになったか>

韓国・朝鮮から猪飼野に移住する人が増えたのは、統計にはないが、大正半ば頃のような。その一般的な理由としては、大正12年頃の平野川開削工事の際、多数の朝鮮人が（強制連行され）集められたのが起源であるという話が定説となっている。しかしこれは誤りだという指摘が少なくない。「同胞のすむ街 猪飼野編」（昭和56年『統一日報』に連載）によると、“平野川の工事開始時には、すでに付近に朝鮮人密集地区が数箇所あった”という証言もあるし、『異邦人は君ヶ代丸に乗って』（金賛汀著）によると、“それまでに茶屋・皮染色工場などで働いていたが、条件が良かったので、平野川開削の人夫募集に応じた”など口述も残されており、猪飼野における在日韓国・朝鮮人の集住は平野川開削工事に始まったのではなく、それ以前の工場労働者の初期集落に始まったというのが有力説だと思わ

れる。ただ、平野川改修工事の頃から在日韓国・朝鮮人が増えだしたという体験談もあり全く関係ない訳ではないが、少なくとも、猪飼野における在日韓国・朝鮮人集落の誕生契機でないことは確かであろう。

猪飼野には済州島出身者が多い。資料によると(『済州島第1号』所収・金徳煥著「新猪飼野事情」や、前述の『統一日報』、『異邦人...』など)大正11年10月から、済州島大阪間に“君ヶ代丸”が運行されるようになったのが最大要因である。そして、大阪に渡航してきた済州島出身者を労働者として雇うという零細工場が、猪飼野地域周辺にあった。当時の猪飼野は、大阪中心部から考えると郊外になり、小企業・零細企業が盛んであった。家内工業の街として、ゴム、セルロイド、金属加工などの零細な産業が発達しており、働く場と生活する場が同じという地域家内工業の特性とあわせて、済州島出身者は、風俗習慣などの同一性と相互扶助の風習が強いこともあり、集住するに至った理由だと考えられている。特に集住開始当初は、生活基盤もなく言葉も不自由な日本で、先に渡航した血縁・地縁関係をたよった結果、集落が形成されたのは当然であろう。

大正13(1924)年、定期航路が開かれた2年後、在阪朝鮮人のうち済州島出身者の比率は60パーセントに達していた(表3)。

<御幸通商店街のコリアゲート>

現在、猪飼野の在日韓国・朝鮮人を象徴する場所といえば、御幸通商店街である。西・中央・東の3つの商店会から成り、全長500メートル、疎開道路から御幸橋までの通りになる。通称「西商店街」(御幸通商店街)は折りたたみ式のアーケードが1つの目印である。神中通りから一条通りまでが「中央商店街」(「御幸通中央商店会」の運営)、御幸橋西詰めまでが「東商店街」(「御幸通東商店街振興組合」の運営)である。

朝鮮市場の発祥の地でもあるこの商店街は、大正15年7月に開設された鶴橋公設市場を核として誕生し、隣接した西商店街の方から東へと発展してきた。その後、公設市場が廃止となったが、在日の文化を生かした新たなまちづくりを目指して、日本人商店主も一緒になって検討を重ねた結果、平成5(1993)年12月、民族色豊かなゲートが建てられ、通りも新たに整備された。中央商店街を挟むゲートには「KOREA ROAD」、東商店街の方は「KOREA TOWN」と刻まれ、「韓日共催二〇〇二年ワールドカップを成功させよう!!」という横断幕も掲げられた。共生の時代のシンボルでもあり、新たな観光客も招いている。

朝鮮市場の発祥

前述の「同胞のすむ街 猪飼野遍」(『統一日報』連載)によると、朝鮮市場の由来は、ある行商人(日本人)が鶴橋公設市場や御幸市場などで、あまり新鮮でない魚の投げ売りを始めたが、他の魚屋が同盟して抗議したので、今の朝鮮市場の真ん中あたりで魚の安売りを同様に行ったところ、朝鮮の人が押しかけたという。そこで他の者も一緒に露店を出して売り始めた。露店は通行の邪魔であるという警察の厳しい干渉により、彼らは露店をやめて店を借りるようになった。これが朝鮮市場の始まりである。本来の朝鮮市場は、“一条通りと御幸通りの交差点から西一帯の御幸通り”つまり、現在の“中央”商店会のあたりだが、表通りは日本人ばかりの商店街で、その裏手が朝鮮市場だった。すなわち、御幸通りにある“中央”商店街の4つ辻

を南に入る路地と、これに交わる東西の路地（現在は西行きの道のみ、丁字路になっている）である。当初の昭和初期には、“長屋の家の中やオモテ（玄関先）にカンカン（石油缶）置いて、明石から仕入れた明太などを売っていた”“韓国関係の物産がなんでもあった”という記述も残っている。そして、この通りの大部分の店が、徐々に日本人から朝鮮の人の手に渡り、市場は大きくなっていった。

コリア・タウン御幸通東商店街振興組合理事長 レストランパゴダ 代表取締役 山本哲司（金在文）氏

コリアタウン・ロード構想について

1984年に、韓国大阪青年会議所と日本の大阪青年会議所が、共同で「コリアタウン構想」を私のところに持ってきました。その前に鶴橋駅前の商店街に構想を提案したらしいのですが、まだ組織が整備されていなかったため、実現しなかったようです。私はすぐ賛成して、東・中央・西の3商店街の役員さんに集まっていただいて「コリアタウン推進委員会・活性化研究会」が結成されました。その時はアーチ型のゲートを設けることに行政の認可が降りませんでした。4～5年後、再調整して提案したら「ゲート（アーチ）」の認可が降りたのです。西の商店街はリーダーや役員の高齢化で参加の意思がないようだったので、東と中央だけ整備されました。その時、計画をマスコミが公表したため、中央商店会会長のところへさまざまな電話が入り、「韓国の街にするとはけしからん」という意見や脅しもあったため、中央は、ネーミングを「コリア・ロード」に変えたのです。東の方は当初の案のまま「コリア・タウン」にしましたがその後抗議の電話もなく、意志を貫いて良かったと思っています。

街ぐるみのお祭りについて

例えば、コリアタウンが整備された記念で「コリアタウンアジア民族まつり」が平成6年3月に開催されました。3回目の平成8年「チョアヨ！コリアンタウン祭り」では、推進委員会が20～30代の若手に再編成されユニークなイベントになったと思います。釜山南浦洞チャガルチ市場・御幸通東商店街振興組姉妹提携記念の「コリアタウンアジア民族祭り」は、平成8年と10年に開催し、大阪市からも助成金をいただきました。「ワンコリアンフェスティバル」というのは開催当初、服部緑地や東京の日比谷公会堂などで行われ、15回目を記念して平成11年にコリアロードで開かれています。こちらは中央商店街が中心です。昨年は東商店街も参加し、大阪市の「1商店街1国運動」の一環としての活動を行いました

お祭りでは、公園や広場で民俗舞踊をしたり、店の前に屋台を設けて特別にお祭りメニューを安く提供します。食べ歩きを楽しむお客さんのために、平成8年に、若手が中心になり御幸通商店街のマップを作って配布しました。外国人が来る商店街というのは大阪の中でもここが一番のようで、4か国語（日本語・英語・中国語・韓国語）で買い物のコミュニケーションがとれる手引き冊子（大阪市商店街連盟作成）も活用しています。

街の現状、これからの試みについて

最も賑わっていた1970年代あたりに比べると特にこの1、2年厳しいです。しかし、商店街の店舗数は微増しており、70歳を過ぎた高齢の店主が、火事で店が全焼した後、後継者

のあてもないが再度店を建て直しているという話もあります。

冠婚葬祭の際の韓国の食材を扱っているのが、電話などの宅配注文だけでけっこう売り上げがある店もある。ただ飲食店が少ない。焼肉屋も3軒だけ。食材の店だけでは弱いと思います。最近、韓国も日本との文化交流へ政策転換して、またワールドカップも控えているせいか、学生の見学が多いです。しかし拠点となる場所がない。新しく 間に地下鉄が開通する計画がありますが、「コリアタウン駅」を設置してもらうにはあと1歩、強力な目玉となる「場」が不可欠です。実は、アジアを代表するような、百済文化や日本と韓国の交流の歴史資料館をつくりたいと思っているんです。また、伝統的舞踏である「サムノリ」の大会を行い1位には賞金を出すことにすれば、日本のサムノリ隊も含めて、参加者も熱が入るし文化交流ができますね。技術や創造性の向上が期待できます。サムノリはオリジナルのにぎやかな舞踏なので毎年でも開催できたら地域に活気ができますね。

朝鮮文化・百済文化の発祥の地として、また朝鮮市場がここから始まったという歴史を伝えるのはこの地域の使命だと思います。日韓ともに協調できるまちづくりが必要です。もう対立の時代ではない。御幸通東商店街の方のゲート（アーチ）は、実はまだ中央部分が空洞になっているのですが、そこに「百済門」の文字を入れることに決めました。やはり、歴史的に意味のある名前を入れたかったのです。今、百済文化やコリアタウンとの縁などをまとめた冊子を作ろうという計画をたてています。中学生高校生をはじめとする多くの見学者に配布して、交流の歴史を伝えていきたいです。

私は、姫路生まれですが、ゼロからスタートして、たまたまこの商店街に食材の仕入れに来ていたご縁から、このまちに、店舗も住まいも構えることができた。その恩返しをしたい。地域の人が誇れるような街にしたいと思っています。

（大コラム）

鶴橋市場～戦後の闇市から国際マーケットへ～

鶴橋駅（JR・近鉄）周辺には、高架下を中心に商店街が複雑に入り組んでいる。

戦前このあたりは、主に小さな町工場と住宅であったが、戦争の激化に伴い、駅付近の強制疎開が実施され、現在のJR鶴橋駅の東西各々百メートル、近鉄鶴橋駅の南北各々30メートルまでの建物が撤去され空き地となった。終戦後、近鉄ガード下を中心として、「いも」「にぎりめし」「古着」などを売るものが増えバラックが建つ。土地所有者の承諾もなく無断で自由市場（ブラック・マーケット）が開かれ、許可なしに統制品・禁制品などの自由販売を行う闇市場となった。それは、大阪でも首位を争うほど広大に成長し、そこで店を出す人も、在日韓国・朝鮮人が大半であったという。1日に十数万人もの人が集まり、しかも法律を犯しあるいは法網をくぐる商取引が中心だったので犯罪の温床となった挙げ句、21年、進駐軍命令をもって、東成・生野・天王寺の各警察を総動員し、闇市場の閉鎖と撤去を断行、バラックは全部取り壊された。その後、この地域を卸売専門の商店街にするため本建築の店舗が建てられたが、22年2月の大火でほとんどが焼失した。

しかし、交通便利な地であることから、その発展性に注目され復興、整備された。商店は最初、卸売専門で発足したが、徐々に小売りも行われる傾向にある。現在でも間口2メートルあまり、奥行き6・7メートルの店舗が所狭しと並んでいる。

「国際市場」と呼ばれる駅の東側には「在日」の店舗が多く、華やかな民族衣装店や、ねぎ焼きにも似たチジミ専門の店舗・屋台なども並んでいる。ここは在日韓国・朝鮮人が多く在住する生野区・東成区双方に隣接するため、コリアン文化が根付いたのだろう。狭い通路の両側に、何種類ものキムチや豚足、豚の耳や頭、魚であれば、エイ、チェギ(いしもち)など、普段あまり見かけない食材が店頭に並べられ、独特の匂いに包まれる。例えば、「カドヤ商店」は、戦後すぐ開業したレストラン(焼き肉・冷麺)と漬物屋(30年程前に始めた)が親子で隣接して店舗を構えている。「たこはち」というチジミ焼き屋さんは、「以前は靴屋だったのが、25年位まえにお好み焼き(チジミ)屋に転向した」と、元気なおかみさんが話してくれた。

「国際市場」に隣接して、生鮮食品の卸売専門市場が続く。「丸小鶴橋市場」「大阪鶴橋卸売市場」である。こちらは、ほとんど日本人の経営らしく、古くから構える店も多い。丸小鶴橋市場で最も古い「山下履物舗」のご主人は、「玉造で空襲にあい、戦後、たまたま現在の場所があったので先代がここで再度商売を始めた。昭和21年頃からバラックを立てて商売をして、そのうち地主と交渉して土地を得た、というお店がほとんどでしょう。」と話してくれた。「大松商店」は、昭和22年の大火の後再建された時、先代がここを入手したという。店長の話では、お正月前など大勢の客で買い物ができない位にぎわった時期もあったが、大阪の東部卸売市場、大阪府中央卸売市場をはじめ、奈良や三重の方にも卸売市場ができたため、顧客は減り、昔からの特定大口顧客(卸)や料理屋をもっている所だけが、どうにかやっていけるという。小売りはほとんどが卸売の残り物だそうだ。「フレッシュ野菜 幸喜」は、空堀商店街から昭和48年ここに移った。鶴橋に来る素人の八百屋さん達にプロの技術を教えてやろうというご主人の意気込みが実って、特に近鉄電車内での口こみで、仕入れに来るお客さんが増えたという。最近は小売りを目当てに近所からの客も絶えないようだ。

衣料品から食材まで、大阪人の生活を支え、在日韓国・朝鮮人の歳時記を彩る一方で、その猥雑な雰囲気と商品力により、観光名所としても注目を集めている一画である。

5. 百済文化の流れを受け継ぐ、猪飼野村

「猪飼野は、在日韓国・朝鮮人の街だという情報ばかり注目されて、旧村の古い歴史があまり知られていないのがさみしい」。村を案内して下さった足代健二郎さんや、猪飼野保存会の方々がおっしゃっていたが、実際のところ、郷土誌を片手に路地を歩いてはじめて、旧村の歴史が色濃く残る地域であることを肌で感じる事ができた。上町台地から続く“歴史の散歩道”に指定されるほど、貴重な資源や物語が残されているが、残念ながら地域の中だけに埋もれてしまっている感もある。また、知られていないが故に、歴史的に意味のある小さな史跡が、第三者の手で突然取り去られたり、老朽化により取り壊されたりして、旧村の面影を残すものが確実に減少しているという。地域遺産を保存するためにも、その価値を誰もが理解できるような工夫、楽しくガイドするツールやシステム、および行政のサポートの必要性を再認識した。

猪飼野が「日本書紀」の時代から“百済”と関連が深いことは、村の氏神である「御幸

森天神宮」の由来や、川や土地に“百濟”の名前が残っていることから確認できる。一方、近代以降今日まで、このまちに在日韓国・朝鮮人が大勢在住することになったのも、偶然とはいえ歴史的な因縁を感じさせられる。百濟文化の特色は、中国や高句麗の文化を受容するとともに、地域文化と巧みに結合し、独特な文化を作り出したところにあると言われるが、この精神が猪飼野の村に根付いている。猪飼野旧村も在日韓国・朝鮮人が集まる一画も、遠い昔の百濟文化の流れを受け継いだ地域であり、今日、独自の異色文化として共存している。

ここには、わがまちを保存し発展させようと、熱い思いで活動する人たちがいる。この地で職住をともにする人が多いのでなおさらであろう。「つるのはし跡」公園の実現は、まさに地元の人の郷土愛を象徴している。また、まちや商店街を舞台に、祭りや催しを確実に展開しながら、地域の歩みと魅力を再確認する試みも活発である。猪飼野の夏祭などは、「青年部」をはじめ次々若い世代に引き継がれているのがたのしい。在日韓国・朝鮮人の積極的な参加もあるという。御幸通商店街を地車が練り進む時、在日韓国・朝鮮人の店主たちがご祝儀を渡して“大阪じめ”の手拍子を受けていた情景に、共生する異文化（異民族）の交流の一場面を感じ、心あたたまることがあった。

コリアタウン・ロードの方でも、ほとんど毎年フェスティバルが開催されているが、手作りのガイドマップや冊子づくりの計画など、ビジターや見学者への心配りはもちろん、まちの魅力として日本と韓国の交流の歴史を伝えたいという思いに感心させられた。活動の核となる「場」づくりを課題として活性化を目指す店主たちの熱意は並々ならぬものがあり、ぜひ頑張って実現してほしい。ここは、在日韓国・朝鮮人がもっとも多く在住する地域、つまり、日本一の国際的都市区なのである。それを自他ともに認識し発信することで、観光資源として可能性はさらに広がるであろう。

猪飼野は、そのたたくまいでもって、民族やまちの歴史的歩みを訴えるとともに、独自の文化を保存し発展させようとする住民たちの心意気によって、その存在意義を私たちに問いかけ続けるだろう。

主な参考文献・資料

- 生野区誌、(S28発行)
- 東成区史(S32発行) 東成区史(H8発行)
- 猪飼野郷土誌 猪飼野保存会発行(H9発行)
- 郷土誌生野 郷土誌生野刊行会(S57～S63発行。H3年 合本)
- 異邦人は君ヶ代丸に乗ってー朝鮮人街猪飼野の形成史ー 岩波新書 金贊汀 著(1985年発行)
- 近代大阪の史跡探訪 ナンバー出版(1975年発行)
- 新々大阪ガイド 大阪府警察「新々大阪ガイド」編集会(S58年発行)
- 在日韓国・朝鮮人 中公新書 福岡安則 著(1993年)
- 「新猪飼野事情」金徳煥(『済州島』第1号 新幹社 より) 1989年
- 同胞のすむ街 猪飼野編 『統一日報』昭和56年連載
- 数字が語る在日韓国・朝鮮人の歴史 森田芳夫 明石書店 1996年
- 在日朝鮮人 朴鐘鳴 編 明石書店 1999年
- 大阪・いまとむかし 朝日新聞社会部 編 昭和42年

御幸通りの現状と将来 京都大学工学部建築系三村研究室

弥生時代のブタについて 西本豊弘 『国立歴史民俗博物館研究報告 第36集』1991

イノシシとブタを考える 安部みき子 『卑弥呼の動物ランド よみがえった弥生犬

大阪府立弥生文化博物館 1996

(取材にあたり、郷土史研究家の足代健二郎さんには、まち歩きの歴史ガイドから、ご本人の研究成果や資料を提供いただき、本当にお世話になった。また、鶴橋駅近くに住む小倉三喜子さんには、鶴橋市場の案内をしていただいた。ありがとうございました。)

写真キャプション(番号は、写真に記入してあります)

優先度 ... 必ず使用 ... できれば使用 なし ... 余裕があれば

1. コリアゲート

2. 猪飼野保存会の地車(夏祭)

3. 折口信夫石碑

国文学者、民俗学者、歌人、詩人。民俗学的国文学、日本芸能史論の創始者で、歌人、詩人としては釈迢空(しゃくちょうくう)と名のつた。

4 「大峯山上三十三遍」入峰記念碑 左すぐ十三、きしな堂、右平野道」等

“十三”とは、俊徳街道が東大阪市に入ると十三街道とよばれ、生駒山中の十三峠を目指すことを意味する。きしな堂は東大阪市長楽寺にあった岸田堂、平野道は平野街道を指す。隣接する西俊徳地藏堂(猪飼野小路村の西端に位置する)とともに、この場所は、旧平野川が流れ百済橋が架かっていた処だという。猪飼野や鶴橋付近には、このような道標がたくさん残されている。

5. 小路村西端から御勝山を臨む。「このあたりは旧村のたたずまいが残っていたが、年々だんだんと面影が薄くなってきた」と足代さん。

6. 小路の宮跡

7. 木村権右衛門邸内神木

8. 大東邸土蔵外壁

古い船底板を使用しており、猪飼野の遺産でもある

9. 大東邸

高敷(一段高くなった部屋で女中は入れない)、供部屋(お供を待たせる部屋)、米蔵もそのまま残存している

10. 大東邸の屋内井戸(電動式ポンプ)

昔は土間で炊事用として、現在は散水用として使用

11. 安泉寺 山門

12. つるのはし跡(つるのはし史跡公園)

13. 御幸森天神宮 本殿

14. 御幸森天神宮

15. 新平野川

16 . 猪飼野新橋

親柱には、黒みかげ石を前方後円墳の形にしてつかい、欄干の支柱も勾玉（まがたま）をデザインしており、日本書紀の一節の文字「為・橋・於・猪・甘・津・号・其・処・曰・小・橋・也」と丸い金属板に記されている。

17 . 地車の音頭をとる 川野 恵弘 さん（中央）

18 . コリアンタウンを地車の一行が通ると、各店主からご祝儀が次々と渡される。

（旧村とコリアン文化を担う人々との交流の一場面）

ご祝儀のあった家の前では、かならず「大阪じめ」の手拍子を行う。

18 コリアンタウンを練り歩く地車一行

19 せまい路地を、大勢が地車の縄を引っ張って歩く

20 . 夏祭では、猪飼野本村の「地車」が主役である

21 . 御幸通商店街（KOREA ROAD）

22 . 山本哲司 さん

23 . KOREA TOWN のゲート

21 . 鶴橋国際市場

22 . 鶴橋国際市場 店頭で韓国の食材が並ぶ

23 . 鶴橋卸売市場

24 . 足代健二郎さん

資料 表 1 . 2 . 3 円グラフ イラストマップ